第 25 号　　2023 年 8 月発行

生活やものづくりの学びNetニュース

巻 頭 言

家庭科教育における「理論と実践の往還」

生活やものづくりの学びネットワーク世話人代表
堀内 かおる（横浜国立大学）

コロナ禍が完全に終息したとは言えないものの、私たちの日常には、徐々に以前の生活が戻ってきています。入学以来マスクを外すことがなかった学生たちの素顔を見るようになり、マスク着用時にはわからなかった表情に触れて、対面であることの良さを改めて感じます。

このコロナ禍の 3 年余りの日々は、私たちが改めて自らの生活を見つめなおし、家庭生活の営みを振り返ることができた日々だったように思います。ステイホームが叫ばれ、「新しい生活様式」という規範に基づいた生活を原則とする日々が続く中で、自らの手で、暮らしを創ることの意味や意義について、考えることが多くなりました。

家庭科教育は、実践的・体験的な活動を特徴としています。重要なことは、活動を通して何を学ぶことができるのか、という点であり、活動自体が学びの目的になるわけではありません。ものづくりを行うこと自体の楽しさはもちろんあるけれど、それがどのような「学び」につながるのか、教育の意義という側面からとらえる必要があります。

「理論と実践の往還」とは、学術的な理論を踏まえながら、学校現場の実践を創っていき、その実践の成果と課題を省察し、再び根拠となる理論を洗練させていく、という循環の中に、授業研究が位置づいていることを示す言葉です。家庭科の調理実習や被服製作実習を行う意義を支えているのは、どのような理論なのか、そしてその理論は実践に対し、どのような解釈を行うことにつながっていくのか、学校現場の実践家である教員と大学の研究者教員がチームとなって、授業を通して児童生徒が何をどのように学んでいるのか、明らかにすることを通して、家庭科という教科の価値が見えてきます。

日本家庭科教育学会では、2022 年度の取組として、家庭科理論プロジェクトを立ち上げ、18 名のメンバーで、家庭科教育を支える理論を構築するために、検討を重ねてきました。取り上げているテーマは、先に述べた実践・体験の意義を特に衣生活において考察するほか、この教科の背景にある学問領域との関連として家政学やジェンダー論、多文化共生、市民性の教育、人生 100 年時代の生活設計を概観しています。また、家庭科の内容として、食生活と環境、住生活、消費生活、子どもの発達と環境、家族の多様性、地域とのかかわりなどが取り上げられています。そして、国際的にみた日本の家庭科の特色や家庭科の学力論、資質・能力の再検討、教師の成長や家庭科ならではの生徒への向き合い方・立ち位置について考察し、これからの授業づくりや教師としての在り方を提案しています。また、ICT とどのように向き合い、活用していったらよいのかという点についても、今後の新しい家庭科授業の方向性として検討しています。

これらの理論研究の成果は、2023 年度内に書籍として刊行される予定です。本書で提起されている家庭科教育の理論を日々の実践に照らし合わせていただき、子どもたちにとっての授業の意義を考えてみる際の、手立てとなってほしいと願っています。

Contents

巻頭言 ・・・・・1
報告「生活やものづくりの学びネットワーク 春の学習交流会 ものづくり再発見　実践編」 ・・・・・2～ 4
2022 年度各地区活動報告 ・・・・・・5～ 7
生活やものづくりの学びネットワーク 第 14 回 (2023 年)総会資料 ・・・・・・8～11
「2023 年度 公開フォーラム」のご案内 ・・・・・12

新しい時代を生きる子どもたちがものづくりに何を学ぶのか
―小学校の実践事例から―

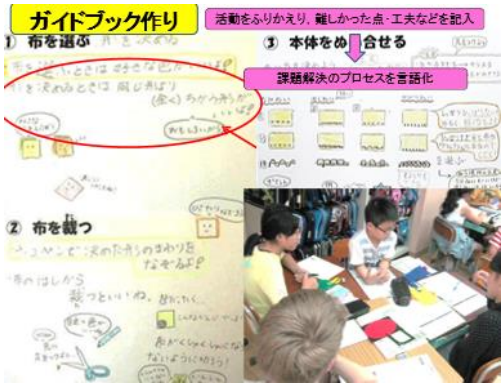
滋賀大学教職大学院特任教授
（元京都市立高倉小学校長）岸田 蘭子

子どもは「ものをつくる」ことを何ができるようになればよいのでしょうか。単に知識や技能を身につけさせ作品が作れればよいのでしょうか。子どもは「ものをつくる」ことを通して何を学ぶのでしょうか。上手な作り方を覚えればよいのでしょうか。子どもは「ものをつくる」ことをどのように学ぶのでしょうか。作品を仕上げることだけに時間を費やしていいのでしょうか。小学校現場では、家庭科の専科ではなく学級担任や家庭科が決して得意とは思っていない教員が指導する場合も多いので、中・高等学校とは少し違った事情もあることも踏まえてこれからの家庭科教育の「ものづくり」について考えておかなくてはなりません。「この時代にものづくりに時間をかける必要があるのか」という声も聞かれます。「ものをつくることを通して、何を考えさせ、何に気付き、何を生活の中に活かそうとするかをいかに学ばせるか」が重要です。そのために小学校期の子どもをよく理解しておく必要があります。子どもは個人差があるものの意欲や期待も大きく、「自分で作ってみたい」「上手に針と糸が使えるようになりたい」と思っています。その反面、不安も大きいですから、知らないことやできないことに応えて満足感や達成感をもたせることが大事です。生活の中でどう活かせばよいかがわかれば、また自分でやってみようと工夫する子どもに育っていきます。針や糸が上手に使えるとどんないいことがあるのか、針や糸は私たちの暮らしの中でどんな役割を果たしているのかなど、やや広い視点で気づかせてほしいと思います。衣食住はもちろん、暮らしの道具や医療の場でも糸と針は人の知恵で暮らしを安全に豊かにしてきました。また最新テクノロジーを支える場面でも針と糸が役立っていることを知れば子どもの学ぶ眼も輝き出します。

小学校の製作実習の事例として「ひと針に心をこめて―マイミニバッグを作ろう―」を紹介します。この事例の特徴は二つあります。一つは小学校のよさを生かして外国語（英語）科とのクロスカリキュラムで教科横断型の取組として教材化したことです。自分の好きな色、好きな形を英語でのコミュニケーション活動を通して材料を準備します。作品が出来上がった段階でも相互評価を英語の時間に行いました。子どもの意欲や満足度は倍増したように思います。

二つ目の特徴は、ミニバッグの作品づくりと並行してガイドブックを作らせたことです。来年の 5 年生が上手に作れるように製作手順に沿って、どこをどのような縫い方で、どのように縫うとうまく縫えるのか、どうすると失敗してしまうから気を付けないといけないのかを図と言葉で記述していきます。

これまで、製作実習の評価は、作品の出来栄えで評価してきたことから、製作のプロセスにおける子どもの思考・判断・表現力は見取りきれてなかったのではないかと思います。このガイドブックは、作品の進度の差もカバーでき、失敗して意欲を持てずにあきらめがちだった子どもも、失敗すればするほどガイドブックに書けることが増えることから気を取り直して、一生懸命向き合えるようになりました。観点別評価においても、知識・技能は知る・できるレベルからわかるレベル、そして使えるレベルへと高まっていきました。また、製作過程で子どもがどのように思考・判断・表現していたのかを見取ることができます。ガイドブックの評価規準は、複数の学級での実践からルーブリックを作成し、基準を共有し、修正を加えていくことで妥当性をもたせていきました。そして、子どもたち自身が互いの作品とガイドブックを鑑賞したり相互評価したりする中でまた学びなおしていく姿も見られました。新しい製作活動のスタイルとして、子どもたちは、作品を作ることだけが目的ではなく、そこから学んだことや活かせそうなことを見つけられたことに満足し、また作ってみたいという気持ちで次の製作に向かえるのではないかと思います。



パフォーマンス課題		
来年の５年生のためにミニバッグの作り方ガイドブックを作ろう。		
ルーブリック（修正後）	3	作成手順や，どのような点に気を付けてどのような縫い方や基礎的技能を用いて製作するとよりよい作品になるかが理由とともに記述されている。
	2	どのような点に気を付けて，どのような縫い方や基礎的技能を用いて製作するとよりよい作品になるかが記述されている。
	1 支援	出来上がった作品や友達との話し合いを参考にガイドブックに示すように助言する。

最近の子どもたちは体験の不足からどんどん手先が不器用になってきています。製作にともなう時間がかかるのは教師にとっても子どもにとっても負担です。それを考えれば、作るものや材料や使う道具も発想を変えていくことでつまずきをカバーすることもできるのではと思っています。これからも新たな教材開発や指導方法の改善の必要性を感じています。

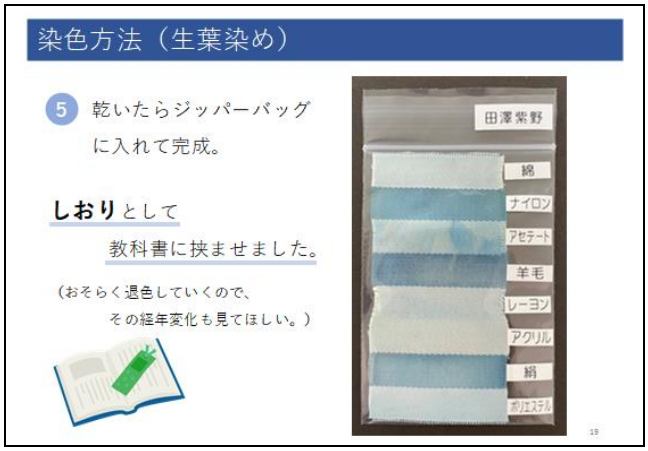
中学校技術・家庭科における「藍の栽培と染色の授業実践」

北海道旭川市立東光中学校
教諭　田澤 紫野

これは、前任校の南富良野町立南富良野中学校での実践です。私は大学時代から染色を専門として研究しており、また、前任校では技術と家庭科の両方を受け持っていたので、「技術で藍の栽培をし、家庭科で藍染めをやってみたい」と思っていました。しかし、結果的に、技術の授業で藍の学習や栽培をすることはできず、「学校の畑で教員が栽培した藍を使って染色の授業を行った」という形になってしまいましたが、授業実践の報告をさせていただきました。

私たちの衣服は染色されており、私たちは当たり前にそれらを消費しています。また、染色は排水などの面から環境とのかかわりが深くあります。そこで、C 消費「持続可能な社会」の学習を経てから、B 衣生活の学習の導入で『衣服と染色のかかわりについて考える』という課題のもと、藍染めの授業を行いました。生徒は「染色」というもの自体をあまりよくわかっていない様子だったので、授業のはじめに、環境に配慮した染色を行っているジーンズ加工会社の動画や、染色と環境問題との関わりについての論文を紹介しました。それにより、「染色は私たちの生活や社会とかかわりが深い」という認識をもつことができたようでした。

藍染めには、藍の生葉を使用しました。まず、葉のみを刈り取り、洗って水気を拭いておきます。次に、水と藍をミキサーにかけ、その液をさらしで濾して、バットに入れます。そこに布をひたし、箸で裏返したりしながら染色を行います。使用した布は、多繊交織布です。これを用いることで、繊維の種類による染まり方の違いがわかります。布を染色液に浸した後、水道水ですすぎ、自然乾燥します。染色液に浸しているときは緑色っぽく見えた布が、水ですすぐと青色に染まっていて、生徒たちから驚きの声があがりました。布が乾いたら、小さなジッパーバッグに入れて完成です。繊維の名称を書いたテプラを貼って、教科書に挟ませて、しおりとして活用させました。



染色後の学習では、繊維の種類による染まり方・色の濃さの違いについて触れました。繊維と色素が結合しないと、布は染まりません。そして、その結合は、染料と繊維によって相性の良し悪しがあり、それにより、色の濃さや染まり方が異なります。生徒たちも染色後の布を見て、藍と相性が良いのは、ナイロン、羊毛、絹だとわかったようでした。

授業後の生徒の感想や様子では、他の天然染料で染色をしたときにはどのように染まるのかということや染色工業や染色方法、SDGs と染色との関係などに興味をもっていることがわかりました。また、藍染めを伝統技術として認識し、これからの時代につないでいくことや染色が環境に与える影響と染色技術の発展について考えた生徒もいました。

今回の授業実践を経て、今後は、他の植物での栽培から染色までの実践について検討したいと思いました。紅花やマリーゴールドといった花が咲く植物なら、学校園を華やかに彩ることができますし、たまねぎや赤しそ、なすといった野菜なら、調理実習にも生かすことができると思います。

また、染色した布でものづくりを行うということも検討したいです。今回は手のひらサイズの小さな布での染色実践でしたが、今度は大きな布を染めて、生徒が日常生活で使える小物づくりができたら、と思います。このような経験を通して、布を自分の手で加工する大変さや楽しさを実感し、その布を使って裁縫をすることで、丁寧に作る意識や、物を大切に使う気持ちにつながればいいなと思います。

今回、藍染め授業を実践し、多くの反省点が見つかりました。しかし、生徒が興味深く取り組む様子や染まった布を見て驚く表情、多様な側面から藍染めを捉えた感想を見ると、やってみてよかったと思います。この収穫を糧に、今後も生徒たちにものづくりの楽しさや奥深さを感じてもらえるような授業実践ができるよう、教材研究に励みたいと思います。

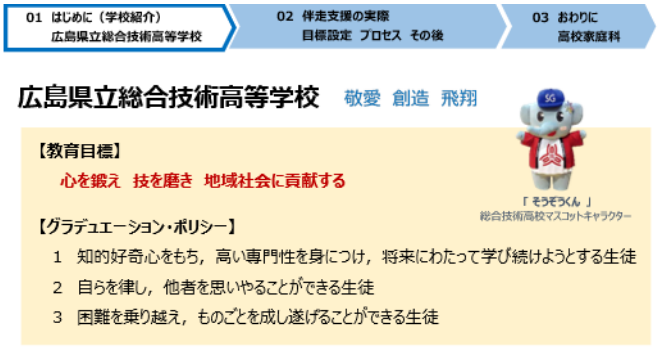
ものづくりに興味・関心をもつ生徒に対する伴走支援の実際
―クリエイティヴコンテストへの挑戦―

広島大学大学院研究生
（広島県立総合技術高等学校教諭）白井 寛子

春の交流会では、必履修科目「家庭基礎」を学び終えた生徒Aが、「ものづくり」にかかわる主体的な目標設定に至った経緯とその取り組みの具体、自己決定支援を意識した伴走支援の実際について報告いたしました。

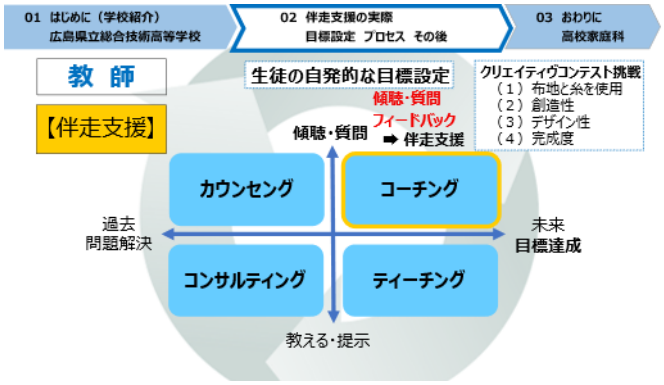
1. はじめに

広島県立総合技術高等学校は、工業、商業、家庭の６つの学科を併設する複合型専門高校です。各学科それぞれの専門性は異なりますが、共通の学校教育目標の実現に向けて、日々の教育活動に取り組んでいます。目的・目標を明確にした、主体的な「ものづくり」の中には、本校が目指す資質・能力の育成にかかわるプロセスが多く含まれると考えています。また、学科・教科横断型カリキュラムやミックスホームルームの設置等、他者の取り組みが見えやすい環境は、生徒の挑戦を後押しするものとなっています。



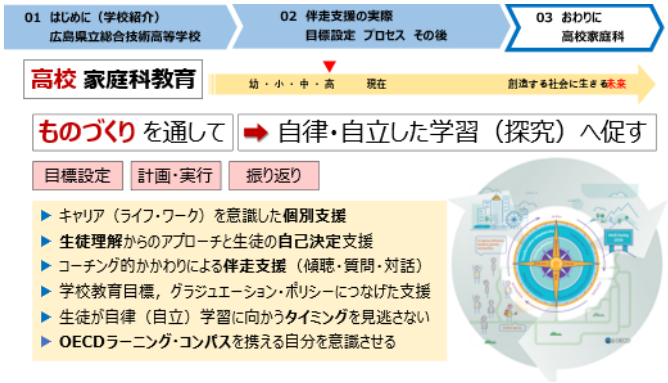
2. 伴走支援の実際

学科に留まらず、学年団を中心とした教員間連携が活発な本校においては、生徒個々人の興味・関心や得意、進路希望を把握しやすい環境にあります。Aに関しても、家庭科が好きであること、絵画制作などの創造的活動を好み、「ものづくり」を通して表現したいとの思いを密かに持っていること、卒業後のキャリア志向についての情報共有がなされていました。そこで、教科（家庭）としても継続的な進路面談を行いながら、生活にかかわる社会課題や各種コンクール等の情報提供を行っていきました。クリエイティヴコンテストへの挑戦という具体的な目標設定後も、Aの自己決定支援を意識した、コーチング的かかわりによる伴走支援を行っています。高校生のAは、既に小学校・中学校での「家庭科学習歴」を持っており、布地の扱いや、針と糸を使用したものづくりに対する知識・技能ともに積み上げがある生徒でした。同様にプロジェクト学習の経験もあったことから、教師の支援は、定期的な面談を通して、制作過程において生じた課題の把握や改善案の相談支援、制作意図等について、A自身の考えを「聴く」ことが中心となりました。納得いくまで修正を繰り返し、完成したAの作品（知育玩具）は、SDGs の目標「15. 陸の豊かさを守ろう」に着目し、子育ての視点から世界の環境保全に貢献したいという思いと、室外で遊ぶ機会の少ない子どもたちに身近な自然について伝えたいという、２つの思いから作られたものでした。「ものづくり」の過程において特に留意してかかわったことは、①制作に関わる具体的な指示は控えること、②本人の作品に対する思いや意図について聴くこと、③教員間連携のもと支援にあたること、④取り組みの過程は他の生徒・先生方にも見える形にすること、⑤制作の過程は記録に残していくことでした。A自身がまとめた１年間のポートフォリオファイルには、Aの思考過程や、他教科・学科の先生方、生徒からの意見も記録されており、３年次の進路資料として活用しています。



3. おわりに

生徒Aに対する伴走支援から、主体的な目標設定、計画・実行、振り返りを伴う、「ものづくり」を通したプロジェクト学習は、自分を律した自立学習に繋がり、生徒の自己実現につなぐキャリア支援が可能であることを実感しています。高校生の発達段階においては、①キャリア（ライフ・ワーク）を意識した個別支援、②生徒理解からのアプローチと生徒の自己決定支援、③コーチング的かかわりによる伴走支援（傾聴・質問・対話）、④学校教育目標、グラジュエーション・ポリシーにつなげた支援、⑤生徒が自律（自立）学習に向かうタイミングを見逃さないこと、⑥OECD ラーニング・コンパスを携える自分を生徒自身に意識させることが、支援のポイントになるのではないかと考えています。



おわりになりましたが、春の交流会では他校種の報告を伺い、改めて、小学校・中学校の延長線上にある高校家庭科教育を通して、生徒の主体的な目標設定に至るきっかけとなる授業づくりを行っていきたいと考えます。

報　告　2022年度各地区活動報告

1. 長野県の活動報告

2022年度は2023年3月5日(日)信州大学教育学部にて、信州大学の福田が「廃棄される農産物（小豆）の色素利用」というテーマで研修会を開催いたしました。家庭科やものづくりに関心を持ち多様な背景を持つ高校教諭3名、元高校教諭1名、(北信地区3名、中信地区1名）の合計4名が対面で集まりました。その他南信地区在住の1名は遠隔での自主研修希望でしたので、糸・生地・色素材等の材料と研修資料（紙媒体）を事前に郵送しました。合計で5名の参加となりました。

繊維による染色性の違い、染色を縫製（製織）前にする場合と縫製（製織）後にする場合の違い、被染物の形状が糸状の場合と生地状の場合の違い等の製作の理論的な特性を理解し、仕上げ作品例の見本観察を通して、各自が作品デザインの構想を行い、製作の見通しを持つとともに製作意欲を高めることができたと思います。まさにプログラミング的な思考に拡げられる家庭生活と結びついた教材が益々求められるところタイムリーなヒントになる学習交流会になったと考えます。デザイン構想工程と染色工程を行い、その後の縫製工程は各自自主製作としました。全く異なる素晴らしい個性的な作品が完成しました。参加者相互に染色段階の作品を見合うことも大きな刺激となり、和気あいあいとした魅力的な楽しい教材研究のひとときになったのではないかと思います。

参加者からは、被服材料が全て学べる良い（実験・実習）教材だ。テキスタイルデザインの実験的研修となり、楽しかった、短時間で結果も見られ、教材としても工夫を加えて採用したい。捨てる前に利用したいものが沢山あるので、参考に小さな実習をしたい。素材によって、色合いも異なり、自然の色合いは美しい。染色ができる・できない（染まる・染まらない）ということを化学的に学ぶことができて面白い。（染まり方の差が明瞭で）実験結果がはっきりしていてわかりやすい。他の食材でも試してみたい。などの感想が寄せられました。プログラミング学習やSTEM教育等に生かしていただけるものと期待しています。研修の機会を与えて下さった本会に感謝申し上げます。

（文責：福田 典子）

▲巾着　(Mihoko MARUTA)

▲コースター（Hiroko　ICHIKAWA）

2. 千葉県の活動報告

日程：2023年3月29日（水）13時30分～15時40分
テーマ：「ウィズコロナ時代の調理実習について」
講師：米田千恵氏（千葉大学教育学部、食物学）

生活やものづくりの学びネットワーク千葉では、第10回学習交流会をZoomによるオンライン方式で開催しました。24名の参加者は、行政、大学、現場、大学生、出版と多岐にわたり充実した学習交流会となりました。

＜学習交流会の内容＞

まず「調理実習に関する学習活動の状況調査報告書(2022)」（千葉県調理実習調査研究会代表・千葉大学 中山節子）についてお話をうかがいました。報告書は、2020年度・2021年度の千葉県内の公立学校における調理実習に関する学習活動について実態を調査し、課題を明らかにした上で、ウィズコロナ時代における安心・安全な調理実習を実施するための方策を検討した内容となっています。

調査結果では、2021年度は何らかの形で調理実習を実施したのは約8割と2020年度から増加しましたが、一方で、年間指導計画やシラバスを規定通りに実施できていたのは全体の15%に留まっていました。担当教員1名では十分な指導が困難・複数指導体制が必要という回答も多く寄せられました。調査結果の考察と課題の整理により、今後の調理実習実施に向けて3つの方策を提示しました。1つはこれまでに実施された小中学校での調理実習のグッドプラクティスの提示、2つは具体的な感染対策の取り方を短時間で視覚的に理解できる動画「家庭科調理実習を安心・安全に行うために」の作成、3つはタブレットなどの「ICTを活用した調理実験動画」の作成です。

次に「食生活をとりまく状況」について、1996年のO157集団食中毒により学校給食の調理場にHACCP（ハサップ）の導入、2000年前後に食品衛生対策として給食や小学校調理実習に生野菜の提供の回避、冬場のインフルエンザやノロウィルスの流行を受けてマスクの着用の進行、2020年からのコロナ禍では衛生に意識が向いた3年間であったなど食生活における食の場面の変遷がありました。

「今後の調理実習と食生活の学習」について、調理実習は公衆衛生上リスクの高い学習活動であることからも、教員のほかに補佐（サポート）にあたる人を配置できることが望ましい、特に複数体制では栄養教諭の支援が重要なものになります。さらに、一人調理・ペア調理・グループ調理を取り入れた学習形態の在り方について、それぞれの特徴や効果について説明をいただきました。そして最後に、調理実習など家で行えばよいという意見もある中で、調理実習の学びは自分

自身の技能の習得だけにとどまらず、友だちの様子を観察して得る学びや安心感、リアル体験することでの気づきや問題発見からの課題解決力の育成等、家庭科の授業で学ぶことの意義・特徴を再確認しました。

さらに中山節子先生から次のような補足の説明をいただきました。「2020 年度・2021 年度に調理実習の実施状況が改善した群は、具体的な形で課題を挙げることができており、一方、改善が見られなかった群は課題が漠然としていた。コロナ禍における調理実習の経験は、より課題を明確にすることに繋がり、調理実習の実施に必要な要求を管理職に提案できることも推察される。また、改善が見られなかった群は新卒や免許外・非常勤の教員の学校であるという傾向がみられた」とのことでした。

家庭科の授業をよりよいものにするための示唆に富んだお話を沢山いただき、そのあとの参加者との交流も含めて内容の濃い学習交流会となりました。

＜行政・現場・大学・学生等立場の違う様々な参加者からの感想や実践コメント＞

〇今回の学習会は、児童生徒の調理実習での学びを止めずに前へ進めようとする素晴らしい取り組み、その工夫の仕方を十分に学べる大変貴重な機会となりました。（大学）

〇貴重な情報や示唆を沢山いただきました。想像はしていても気づけなかったことばかりでした。教員志望の学生たちにすぐに反映できないかもしれませんが、色々工夫して体験学習（リアルな学び）の大切さに気付くことができるよう努めたい。教える先生（の卵）も実際に体験する機会を作らないと‥と痛感しました。（大学）

〇2022 年度は保護者のサポートがあり地域食材を使って実習は４回できました。（中学）

〇学生ボランティアとして複数体制の実習に参加して感じたことは、生徒の実態を把握して実習を行うことが大事。生徒はボランティアにも質問をして複数体制の効果がありました。一人調理・二人調理を含めて調理実習は生徒の可能性を広げることができ、次への改善点につなげ、他の人への働きかけにもなっていることがわかりました。（大学生）

〇家庭科教員について非常勤講師しかいない地域もあり、地域差が大きい。コロナで経験の差が広がった感があります。（高校）

〇課題等は自分から要求しないとダメだということがわかりました。行政に求める方法や支援についても考えなければいけません。（大学）

〇非常勤の先生も含めてきちんと家庭科の学びができるよう研修体制を考えなければいけないと思いました。今日の学習交流会で調理実習の学びの意義をあらためてしっかり確認できました。行政の中から調理実習の意義についてもっと発信していきたい。（行政）

（文責：小谷 教子）

3. 東京都の活動報告

2022 年度はコロナ感染の状況を見ながら活動を少しずつ再開していった。オンラインでの実行委員会は 9 回開催した。コロナ禍以前は、江戸川区小学校すくすくスクール（児童館と学童クラブの機能を兼ね備えたような放課後児童育成施設）2 か所で実施していた縫い物と編み物講座を１か所で 8 月と 12 月に開催した。また、3 月には新しい試みとして小中高教員対象の実技講習会を様々な支援を受けて無料で開催した。その際に活動補助費を有効に利用させていただいた。お礼を申し上げるとともに今後も継続した支援をお願いしたい。以下詳細を記す。

＜江戸川区中小岩小学校すくすくスクールでの活動＞

（1）縫い物講座の開催

日時：2022 年８月 24 日（水）11:00～16:30

内容：「ランチョンマット」の縫い物指導

参加者：小学４年４名（内男子１名）、５年６名、６年１名　計 11 名

講師：東京実行委員６名、会員１名、他２名の計９名

（2）編み物講座の開催

日時：2022 年 12 月 26 日（月）11:00～16:30

内容：「手編みのマスコット　すみっコぐらし」（児童が選択した 1～2 点）の編み物指導

参加者：小学３年６名、４年５名、６年２名（内男子１名）計 13 名（女子 12 名、男子１名）

講師：東京実行委員７名、会員１名　計８名

（3）成果と課題

参加児童は、一生懸命製作し、ものづくりの楽しさ、達成感を感じるとともに大人からの丁寧な指導に満足していた。特に編み物については好きなキャラクターが作れて楽しかったとの声もあった。

参加児童は縫い物、編み物が好きで自分の意志で参加していた。家庭科を学習していない４年生以下でも興味・関心・意欲があれば、製作できるとの実感を強くした。課題は、児童のニーズや興味にあった教材の開発と多様な児童に対する指導法の研究である。

これらより 1～２点選択

＜小中高家庭科教員対象の活動＞

（1）実技講習会の開催

日時:2023 年 3 月 29 日(水)
9:00～12:30

場所：愛国学園短期大学
被服学実習室

内容：実技講習会
―家庭科授業に活用できる作品製作と指導法について―

製作品：裏付きミニトートバッグ(制服余り生地の活用)と巾着袋(木綿生地)

講師：大久保浩美氏（元 東京都葛飾区立中学校 家庭科主任教諭）

（2）この講習会の提案のポイント

用具や指導の工夫で、失敗なく時間短縮ができる指導法、しるし付けや型紙が無くても製作ができる作り方、開発教育、SDGs に関連させた「生活を豊かにするための布を用いた製作」教材や資料の紹介、SDGs を実習に組み込み「主体的に学習に取り組む態度」の観点別評価規準に繋げる方法を提案した。

（3）成果と課題

参加者の新教材・教具やベテラン講師の詳細な実習指導法が大変参考になったとの声が多かった。実習をしながら他校の教員と情報交換もできてよかったとの感想もあった。来年度以降、これらを採用した企画を考えていきたい。

＜今後の課題＞

児童を通した保護者への家庭科教育の PR の方法の研究と現役教員の要望も組み入れた研修と情報交換の場の提供の企画である。これらを通して、より一層、家庭科教育の充実・発展に寄与していきたい。

（文責：亀井 佑子）

事務局からのお知らせ

1．年会費の納入をお願いします

2023 年度の請求を宛名用紙の裏面に記載しております。9 月 30 日までに納入をお願いいたします。

2．学習交流会等への活動補助費を支給しております

本ネットワークでは、各都道府県での学習交流会・講演会・勉強会等の活動を支援し、本年度も例年どおり活動補助費（1 万円）を支給しております。希望される場合は事務局までお申し出ください。

3．メーリングリスト（ML）にメールアドレスを登録し、情報発信・交換等に活用ください

ＭＬを活用して、総会や学習交流会、各関連団体からの研修会等のご案内や会員同士の意見交換等並びに事務局からの連絡を行っています。またＭＬに登録することで各種情報を添付ファイルをつけて配信することができます。情報の配信に不慣れな場合は、事務局にお知らせいただければ事務局から配信いたします。ＭＬへのメールアドレス登録及び変更は、事務局（seikatsu_nt@yahoo.co.jp）までお願いいたします。

ＭＬアドレス：seikatsunetmail-ml.seikatsunet.com@ml.seikatsunet.com

4．新版ビジュアルパンフレット（2019 年 4 月版）を活用ください

新版ビジュアルパンフレットは、新学習指導要領への対応及び資料を更新するなど大幅な改定を行い、内容を充実させています。家庭科、技術・家庭科の学びの重要性を理解していただく資料として、すでに大学の授業や研究会、情宣活動等に活用いただいております。パンフレットがご入用な方は事務局までご連絡ください。

（・パンフレット代は無償　・送料は会員拡大用に使用する際は無料、大学等の授業で 31 部以上は着払で有料）

なお、HP にパンフレットのデータが掲載されています。ご自由に印刷してお使いください。

5．ニュースレター送付先住所の変更について

勤務先の異動、引っ越し等でニュースレター送付先住所が変更になった場合はお早めに事務局までご連絡ください。なお、送付先は、原則自宅住所でお願いします。

6．退会届の提出について

退会される場合は「退会届」の提出をお願いしております。ホームページに「退会届」の書式が掲載されておりますので、ご記入の上、メール添付か事務局への郵送でご提出ください。なお、年度ごとの退会となりますので、年会費をお納めの上、退会をお願いします。

事務局メールアドレス：seikatsu_nt@yahoo.co.jp
ホームページ URL：http://seikatsunet.g3.xrea.com/

「生活やものづくりの学びネットワーク」第14回（2023年）総会資料

【報告事項】

Ⅰ　2022年度活動報告（2022年4月1日～2023年3月31日）

1．ネットワーク参加人員数

2023年3月31日現在　個人会員296名　団体会員　18団体

2．交流会の開催

公開フォーラム

日　時：2022年9月25日（日）13：30～16：00　Zoomによるオンライン開催

テーマ：ものづくり教育再発見

話題提供者：

・鈴木 明子 氏　（広島大学大学院人間社会科学研究科 教授）

・鈴木 賢治 氏　（新潟大学教育学部 教授）

コーディネーター：

・堀内かおる 氏（横浜国立大学教授）

・川邊　淳子 氏（北海道教育大学教授）

春の学習交流会

日　時：2023年3月25日（土）13：30～16：00

Zoomによるオンライン開催

テーマ：ものづくり教育再発見 実践編

シンポジウム

・「新しい時代を生きる子どもたちがものづくりに何を学ぶのか　ー小学校の実践事例からー」

滋賀大学教職大学院教授(元京都市立高倉小学校長)　　岸田 蘭子 先生

・「中学校技術・家庭科における藍の栽培と染色の授業実践」

北海道 空知郡 南富良野町立 南富良野中学校教諭　　田澤 紫野 先生

・「ものづくりに興味・関心をもつ生徒に対する伴走支援の実際 ークリエイティヴコンテストへの挑戦ー」

広島大学大学院研究生(広島県立総合技術高等学校教諭)　白井 寛子 先生

パネルディスカッション

・司　　会　鈴木 明子 氏（広島大学教授）・鈴木賢治氏（新潟大学教授）

・総合司会　知識 明子 氏（NPO法人家庭科教育研究者連盟）

3．ロビー活動

2023年3月10日に、文部科学省教科調査官　熊谷有紀子氏（家庭）・渡辺茂一氏（技術）と面談し、家庭科、技術・家庭科の現状と今後に向けた課題について意見交換をした。参加者は堀内かおる世話人代表、石井克枝副代表、鈴木賢治副代表。

4．会員の交流および宣伝活動

① ニュース発行　第23号（2022年8月）、第24号（2023年2月）が発行された。

② コロナ禍で活動が制限された県（支部）が多かったなか、３都県で対面、Zoomやハイブリッドで活動が行われた。

③ メーリングリスト上での情報発信や意見交換が行われた。

④ ホームページを適宜管理した。

5．各会議の開催

(1) 総会　書面審議とし、異議なく承認された。

総会資料は「生活やものづくりの学びNetニュース」23号（2022年8月発行）に掲載

内容　・2021年度活動報告

・2021年度決算報告

・2022年度活動方針

・2022年度予算案

・2022年度運営体制

(2)　実行委員会

山形県、長野県、千葉県、東京都の学習交流会実施について、「生活やものづくりの学びNet ニュース」23 号の掲載で報告

(3)　世話人会

第1回　2022年 5 月21日(土)　16:00～17:30　Zoom
第2回　2022年 7 月24日(日)　10:00～12:00　Zoom
第3回　2022年 9 月 4 日(日)　10:00～12:00　Zoom
第4回　2022年11月20日(日)　16:00～17:40　Zoom
第5回　2023年 1 月22日(日)　14:00～15:40　Zoom

Ⅱ　2022年度　決算報告　(2022.4.1～2023.3.31)

生活やものづくりの学びネットワーク 2022年度決算報告　(2022.4.1～2023.3.31)

収入の部　(単位:円)

科目	予算	決算	備考
2021年度繰越金	990,009	990,009	
個人会員年会費	300,000	293,000	延べ293人(19年5件、20年12件、21年29件、22年180件、23年37件、24年以降30件)
団体会員年会費	140,000	150,000	1口5000円、なるべく2口以上、延べ18団体(21年1万円×1件、22年年1万円×11件、5千円×6件)
寄付	50,000	66,000	個人11件
雑収入	0	0	
利息	5	11	
計	1,480,014	1,499,020	

※個人会員296名　団体会員数18団体(2023.3.31現在)

支出の部　(単位:円)

科目	予算	決算	備考
印刷代	100,000	82,830	ニュースレター(2回)
送料	100,000	84,970	ニュースレター発送、資料・パンフレット等の発送代
事務用品	5,000	2,244	トークン代、インク代
活動費	45,000	52,420	地区活動補助、ロビー活動交通費
HP・ML管理費	40,000	27,351	HP更新、ML管理(メールサーバー使用料、ドメイン更新料)
会議費	3,000	0	
イベント運営費	100,000	30,330	フォーラム・春の学習交流会の講師謝礼
事務局アルバイト謝金	105,000	105,000	会計、会費管理、名簿管理等
日本家庭科教育学会事務所使用料	20,000	20,000	資料等の保管
予備費	962,014	0	
小計	1,480,014	405,145	
次年度繰越金(残高)	0	1,093,875	
計	1,480,014	1,499,020	

監査の結果相違ありません
2023年4月30日
会計監査　上村　協子　㊞
会計監査　新井　映子　㊞

【審議事項】

Ⅰ　2023 年度活動方針（2023. 4. 1～2024. 3. 31）

1．　生活やものづくりに必要な学びの意義について広く討論をすすめる

①　学校や教育課程の在り方を含めて、生活やものづくりの学びについて、意見交換や学習会等を開く。

②　マスメディアなどを通して活動を広報する。

2．　生活やものづくりのための授業・実践活動を充実させ、交流する。

①　各県の授業・実践活動を中心とした学習交流会を開催する。

②　授業・実践活動交流会は、保護者や地域の人々の協力を得るように努める。

③　授業・実践活動交流会などの小集会には、補助金１万円を支給する。

3．　啓発・宣伝および会員の拡大をする

①　学習指導要領の改訂や新しい教育動向を反映させた新版のビジュアルパンフレット（2019 年４月版）等を活用し、生活やものづくりの学びの意義を広くアピールするとともに、勧誘（改訂版）リーフレットを用いて会員を増やす。

②　ＨＰを充実させ、本ネットワークの意義と活動を知らせていく。

4．　会員相互の交流を活発に行う

①　ニュースレターを年１・２回発行する。

②　メーリングリストやHP を活用し、会員相互の活発な情報交換の場とする。

5．　ロビー活動を行う

①　世話人会と事務局はロビー活動を推進する。
中央教育審議会委員や関係部署に、家庭科、技術・家庭科の充実に関する要望書を送付するほか、面談の機会を持つようにする。

②　各実行委員・会員は、ロビー活動を行い、状況を把握し、会員に情報を伝達する。

Ⅱ　2023 年度　予算案　　（2023. 4. 1～2024. 3. 31）

生活やものづくりの学びネットワーク　2023年度予算案　（2023.4.1～2024.3.31）

収入　（単位:円）

科目	決算(2022)	予算(2023)	備考
前年度繰越	990,009	1,093,875	
個人年会費	293,000	250,000	1口1000円×（延べ250人）
団体年会費	150,000	140,000	1口5000円、なるべく2口以上（延べ18団体）
寄付	66,000	50,000	
雑収入	0	0	
利息	11	10	
合計	1,499,020	1,533,885	

支出　（単位:円）

科目	決算(2022)	予算(2023)	備考
印刷代	82,830	130,000	ﾆｭｰｽ(2回発行)、資料コピー、リーフレット増刷り
送料	84,970	100,000	ﾆｭｰｽ、資料等の発送代
事務用品	2,244	5,000	封筒、ラベル
活動費	52,420	60,000	ロビー活動、小集会・学習交流会地区活動補助
HP・ML管理費	27,351	40,000	HP更新、ドメイン・メールサーバー使用料
会議費	0	3,000	世話人会・実行委員会の会議費
ｲﾍﾞﾝﾄ運営費	30,330	100,000	講演料、会場費等
事務局アルバイト謝金	105,000	105,000	会計、名簿管理、発送作業等
日本家庭科教育学会事務所使用料	20,000	20,000	資料等の保管
予備費	0	970,885	
次年度繰越金	1,093,875	0	
合計	1,499,020	1,533,885	

Ⅲ　2023 年度　運営体制

＜◎世話人代表　〇世話人副代表＞

	2022. 9～2023. 9	2023. 9～2024. 9	
世話人	◎堀内かおる	◎鈴木 明子	日本家庭科教育学会
	〇石井 克枝	〇石井 克枝	全国家庭科教育協会
	〇鈴木 賢治	〇鈴木 賢治	産業教育研究連盟
	知識 明子	大矢 英世	家庭科教育研究者連盟
	川端 博子	川端 博子	(一社) 日本家政学会
	鈴木 明子	木村 範子	(一社) 日本家政学会家政教育部会
	鎌田 浩子	小田 奈緒美	日本消費者教育学会
	渡瀬 典子	若月 温美	日本家庭科教育学会関東地区会
	角間 陽子		(一社) 日本家政学会生活経営学部会
	小西 文子	小西 史子	(一社) 日本調理科学会
	川邊 淳子	土屋 善和	日本家庭科教育学会
会計監査	上村 協子　新井 映子	上村 協子　新井 映子	
実行委員	各県、正・副 2 名を基本とする		★任期は例会から総会まで（例年 9 月の第 4 日曜日）としています。
事務局	浅井 直美　小谷 教子　坪内 恭子　渡邊 彩子		

※総会につきましては、今号の掲載をもって書面審査とさせていただきます。ご意見等がありましたら、9 月 9 日(土) までに事務局にメールでご一報ください。ご意見がない場合は、ご承認いただいたもの とみなします。なにとぞよろしくお願いいたします。なお、世話人一覧の未定欄は、各団体の役員交代 時期がこれからのため、ご了承ください。

会員継続のお願いと新規入会のお誘い

★本会は、2010 年の設立以来、経験豊かな会員の方々から、これからの家庭科、技術・家庭科を担う若い会員の方々まで、幅広い年齢層の会員の皆様に支えていただき今日まで活動を継続してまいりました。これからも、皆様のお力添えをいただきながら、生活やものづくりの学びの意義と授業実践の成果を発信・共有してまいります。長きにわたり本ネットワークを支えていただいた方々におかれましては、ご退職を迎えられる機会にあっても、引き続き会員を継続し本ネットワークを応援してくださいますよう、心よりお願い申し上げます。

★家庭科、技術・家庭科の今後の発展のためには、この教科の重要性について声をあげていく必要があります。 家庭科、技術・家庭科の魅力を、ご一緒に発信していきませんか？一人では難しいことでもネットワークとして力を結集すれば可能です。そのためにも、会員を一人でも増やしていただきたく、お願いいたします。入会届やリーフレット・パンフレット等はホームページからダウンロードできます。ネットワークを周りの方や研究会のメンバー、教員、学生、保護者、一般の方にご紹介し入会をお勧めくださるようお願いいたします。

世話人代表　堀内 かおる

生活ものづくりの学びネットワーク 秋のフォーラム

家庭科教師のための金融教育ワークショップ

―実践と体験を通じた教育方法の紹介―

コロナ禍がいくぶん落ち着きをみせ，気が付くと社会の動きが大きく変わっていました。Z 世代，α 世代などの用語が飛び交い，この世代が中学生，高校生になっています。また学校教育でもリスク管理を踏まえた家計管理を理解できるよう指針が示されています。

そこで今回のフォーラムでは，数多くの現場での実践への参画を行ってこられた金融教育プランナーを講師に迎え，金融教育の重要性と学校教育への位置づけを始め，小中高の各段階における生涯を通した家計管理とリスク管理，さらには，現場で役立つ実践的な金融教育アクティビティの紹介をしていただきます。

講　師 ： 盛永 裕介 氏（JAM Academy 学長・金融教育プランナー）

コーディネーター： 鎌田 浩子 氏（北海道教育大学釧路校教授）

【日　　時】2023 年 9 月 30 日（土）13:30～16:00

【実施方法】Zoom による遠隔開催 （参加費無料）

【申込方法】9月 22 日（金）までに事務局の Web サイトに掲載のフォーム あるいは下のQRコードからお申込みください。参加方法は申し込まれた方に，後日ご案内いたします。

問い合わせ先

生活やものづくりの学びネットワーク事務局
Email:seikatu_nt@yahoo.co.jp
Web：:http://seikatsunet.g3.zrea.com/